

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	吉田吞宇を哭す : 雑録
Author(s)	穂村
Citation	龍南會雜誌, 77: 59-64
Issue date	1900-02-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5490">http://hdl.handle.net/2298/5490</a>
Right	

○炭斗 五石の瓢を椽近く据えたらましかば、やがて炭取のいとゆかまゝ、かの蓬心の誹をも免れ  
たらましを、恵子は愚なる男なりけり、張子作りのそれは趣いと深し、たま／＼紙衣の翁のあなが  
ちなる心をたよりにて、朝夕の御前去らず侍るものから、御足のはこび危きにつけて、折々御装の  
はまにかゝりてくつがへさるれば、よりどころなく心細くて、襖の中なる反古籠の上をのみ戀ひま  
さる

炭取は鴉の巢にも似たらんか

○炭鉤 深田をあさりま鷺の脛に似てすまじく、遠きより炭をかきよする手心いと覺束なし、煙  
に立ち入りて焦熱の情をあらはし、用なき折は枯木の如く横はる、世にも怪しき瘦禪なり

かきよする石炭凍てゝからゝと

○石炭 渦まゝ黒煙見るからにいふせく、魔女が使ふ夥まき小鬼の走るらんと覺えて、おそろま  
いはん方なし、それまた土くれの燃ゆると見ればをかまゝ、五平太の名さへいと甲斐／＼し、ひ  
どつ／＼の燃屑、はた、蜀山の秋景を盡しつべくや

灯をつけて石炭船のみぞれ行く

## 吉田吞宇を哭す

穂 村

畏友吉田宗治君逝けり、暮鴉は庭後の松に鳴き、君は白玉樓中の人と爲りぬ、悽惻何ぞ堪へん、

熊本校に入りて將に三歳、友を得たる少きとせず、然れども君を待たて又眞の友なき、君吾を思はずとも吾は君を慕ふを禁する能はざりき、去歲九月再び君と相見ると樂み、倉皇郷里を辭して校に登れば君未だ在らず、友に就て問へば將に熊本に向はんとするに當りて宿病未だ癒せず、姫路病院に静養すと云ふ、失望措く能はず僅に書を以て慰む、君亦健筆宜く吾が爲に答へ病の身にあるを知らざるが如き、後歲且に暮れんとて人は新年を迎ふるに忙はき時、君に一封の賀狀を認めて未だ發せず、突如君の訃報に接す、嗚呼君眞に逝きたるか、君の萬福を祈りたる年賀狀は墨痕鮮かに机上に在り、君の超歳を祝したる筆は忽ちにきて君を吊ふの筆となりぬ、噫君は遂に三十三年を迎ふる能はざりき乎、朔風獵々たる時君と共に紅葉山に登り、遙に熊本城を望みて古英雄を吊ひたるは今尚昨日の如し、而えて君今はなく、共に吊ひたる君も亦吾が吊ふ所となれり、知らず、余は亦誰に依りて吊はるべきか、

君の時事を論ずるや引證頗る博く、論理極めて明晰、好んで古人の句を用ひ、雄辯滔滔人をして首肯せざりざれば止まざりき、一夜寒月龍山に懸れる時君を室園村の僑居に訪ひ、大に所謂九州男子を論じたるは今尚昨日の如し、而して未だ九州男子と力を角するに及ばずして逝けり、君の恨み果して如何、

君一日余が寓を訪ふ、机上偶々伊藤侯爵の畫像あり、君戯れて曰く、君の抱負は此の如きに過ぎざる乎と、余笑ふて答へず、翌夜吾又君を訪ふ、君『ビスマルク』の寫眞を机上に安置せり、吾則ち殊更に眞面目を裝ふて曰く、君の理想的人物は『ビスマルク』か、何ぞ抱負の小なると、君百方其の然らざる所以を辨じ、此公を論難すること頗る詳密、吾の戯るゝを知りて則ち止む、嗚呼鐵血宰相

は一世の英傑なり、十九世紀は實に彼が驚天動地の舞臺なりき、而て二十世紀は將に君が活動の舞臺たるべかりしに、悲哉比公に擬したる君は比公を追ふて共に前世紀の人とて死なぬ、去年の今日は余が斷腸の日なり、新年の儀式形の如く終りて父は廻禮に出で弟妹は校舎に登りぬ、吾は獨り書齋に入りて賀狀を認むること僅に數葉突然下婢襖を開きて君の來訪を告ぐ、君約を履みて豊後より耶馬溪に至るの途拙宅を訪はれたるなり、岡らざき、一月一日に於て旅程に在りし君と相見んとは、更に岡らざりき、今年一月一日君を悼むの文を草せんとは、君が常携の棒を投げて、草鞋を解き、足を洗ひながら吾と相語りし時吾が喜は如何許りなりしぞ、友の遠方より來れる樂は吾君に依りて初めて解し得たり、君が長途の旅行に益々壯んなりし相貌は吾の忘れんと欲えて忘るゝ能はざる所、思ふに君が尤も健康の時なりしならむ、朝より夜半に至る迄、鯨飲馬食、高談放論家人の驚くを見て大笑したりし君も一の病には勝つ能はざりしか、闇無濱くらみの松の根に腰を掛け遙に中國を望みては君の郷里を談じ、白波岸を打つを見ては洋行の時は何なと語り合ひし時は君も吾も如何許り樂しかりぞ、君が耶馬溪に行くを送らんとて宮永村に至りし時、君は之より歸れと云ひ、吾は三口迄はと争ひまも今はなかゝ仇なれや、『明年上京の時は必ず立寄られよ、共に明石の濱に遊ばん』『必ず參るべし、馳走には何を爲さ給ふや』とは君も期し吾も待ちたる所なりしに、明石に遊ばんと云たる吾は、邱上草深き所君の墓を吊はざるを得ざるなりぬ、人生は有爲轉變、生者は必ず滅え、會ふ者は常に離るとは云へ、豈に此の如く急に悲喜處を代へたるものあらんや、願へば既に一昨年之事なりしか、君が同級生徒の疏遠なるを憂ひ、同志を集めて法、二、甲の茶話會を開き、共にクラス親睦を計りまが、君の希望空々からず、爾來各月之を催し成績大に擧りまも、

君の病を以て休學するや、此の會も立消えとなり了りぬ、會の先立ちたるか、君の従ひたるか、今や君無く茶話會なし、誰と共にか語り何に由りてか談せん、

君の性尤も旅行を好み、暇あれば則ち旅程に上れり、君の郷里に在るや、遠く山陰の諸洲を踏み、或は海を渡りて四國に行けり、其の熊本に來るや、未だ二年ならざるに既に薩隅の險を超へ、或は兩筑の野に遊び、或は二豊の山水に放嘯し、足跡殆んど九州に普え、嘗て吾に告げて曰く、余の望は五大洲を跋涉し盡せば則ち足れりと、君又詩歌を嗜み佳作從て少からず、其の筆跡の美と相須ちて克く君を表はし得べかりしに、惜哉未だ世に示すに及ばずまて君先づ逝けり、

嗚呼君は寛にまて而も嚴、温厚なれども柔に至らず、剛毅に、快活に、友愛に、友として尤も頼母敷、敵としても又尤も尊敬すべき人なりき、君の周圍は嚮望と尊敬とを以て滿されき、而まて君は之等の一切を棄て、忽焉として逝きぬ、今や音容兩つながら杳然として求むべからず、空しく朋友、故舊の涙潜々たるのみ、人生の恨事多しと雖も志を齎して逝きたるより大なるはなし、悲き事尠からずと雖も親しき友に死別れたるより、悲ききはあらじ、嗚呼君は眞に逝きたるか、白川の水は盡きることあるも吾の恨は消ゆることあらざるなり、バイロン云へり、

*Heaven gives its favorites early death.*

と君も亦天の寵兒たらざるを得ざりしか、何ぞ憎まれ兒となつて其の命を全ふするに如かんや、余は殆んど情に堪へざるなり、

明治三十三年一月一日

追記に曰く、超へて十四日同郷の諸兄君の爲に追悼會を宗岳寺に開き、懇に君の英靈を慰む、余

席末に列して老僧の讀經を聞き、誠に人生の味氣なきを感ぜり、歸つて靜に冥想すれば涕淚潸然とゑて禁する能はざりき、

余も亦吞字と交あり。本校に入學きて以來、常に同一教場に教を受け、名に於て既に相識りしかども眞の所謂知己の交を結ひしは、一昨年之秋、寓を龍山の麓、山口に移せし以來にてありき。當時氏も亦隣家に在り。余一日秋雨に閉され、破窓の下、懷郷之情、轉た禁する能はず、筆を走らせて『故郷の懷』てふ一片の新體詩を作る。夕刻漸く稿を脱せし頃窓下切に余を呼ぶものあり。請じて之をみれば、乃ち吉田君なり。煮茶一喫、氏黙て言はず。余も亦巖然とゑて氏か面を視る。斯くの如くするもの暫時。氏手を伸ばして余が机上の詩稿を取り、懷手安坐きて之を讀む事二三回、初めて口を開いて曰く。誰の作ぞや。余笑つて曰く。今僅かに稿を脱するのみ。と、此に於て大に詩を論し、歌を論し、文章を論じ、口津々沫を吐き、滔々辯きて止まず。側ら余が詩文を難す。蓋し、初見を憚らず、毅然とゑて鯁言人を難するは、氏が特性なりきなり、余始め之れを知らず是故に意甚だ喜ばす。惟諾々して一時を苟偷せんとす。氏益論きて止まず。此に於てか論端衝突し、辨難攻撃を始め、更漏十を報するに至り夜の早からざると、且つ門外の道に對し、眞面目なる議論をなしつゝけたるに氣づき、啞然とゑて哄笑きて別る。嗚呼是れ實に、余が君と交りたる最初の會話なりしなり。爾後往來一日も絶ゆることなく、朝は手を携へて相共に登校し、夕は袂を列ねて共に龍山にのぼり、或は墓間に徘徊して古詩人を想ひ、或は巖角にのぼりて時勢を論じ、大に政治家を氣どる。登校、歸校、晝食の往來、湯入、油買迄も、相供はざるはなく、同窓机を并ふるよりも親かりき。秋既に去つて冬來り、考試既に終つて我徒みな閑居す、余遇ま九州北部旅行を企て、八幡岳の余脈、陣駒

として谷深かき處、杖嶺の峻秀、雪隠々たる處を跋涉して、隈町に出で、尙ほ進んで耶馬溪に入り、正月二日、靑を發して中津に下らんとす。巖壁峭然削るが如き、一面には滄々たる山國川の深淵に臨む處、遙かに一幹の大『ステッキ』を提けたる洋服装の一士、悠々として來るを見る。漸く近づいて之を見れば、吉田君なり、余其接近するを待つ能はず。叫んで曰く『吞字か』、君亦聲を發えて曰く『想峯か、君か異様の『ステッキ』と草袋は、能く吾をして君なる事を知らしめたり』余曰く『余も亦之に由て君なることを知れり』と蓋し經二寸に近き異様の『ステッキ』は、吞字と余と、常に手を離さざる寶物の一なればなり。吞字曰く、君何處に行かんとするか。曰く、中津に出で、九州の北部沿岸を回轉せんとするなり。單身山野を跋涉し、或は道を迷ふて樵夫の半褥をかり、或は木賃宿に寒夜をさめあかし、我既に孤旅の、面白からざるを知れり。願くば君余と行を同うせよと、此に於て大に門司馬關の千帆飛入する處、博多灣の白砂青松。渚に長へに渡寄する處、唐津灣頭、小富士の蔚乎とまて峙ち、松渚を繚る處を談す。吞字曰く、山水の景色、佳は則ち佳ならん。然れども敵は本能寺にあり。余が目的地は、耶馬溪を措いて外なきなりと。余遂に其動かす能はざるを知り、斷然袂を分ちて中津に向ふ。嗚呼是吞字か穗村を訪ひし後一日、而かも彼と別れたる日の、夕刻にてありき。以來、余は故あつて學寮に入り、常に君と相見る能はず。疎々として相識らざるか如くなりき。今年正月其訃言を聞きて始めて愕然たり。今更に此文を讀むに及び、懷舊の情轉た禁する能はず。乃ち書して以て附く